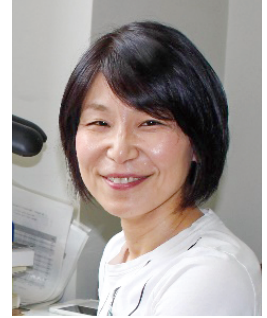


連載：研究者になる！－第88回－

文学研究科・准教授 丸山 里美



●音楽を通して興味を持った社会学

高校生の頃は、軽音楽部でバンド活動に明け暮れていました。音楽がその時代の社会的状況や差別された人たちの声を反映して生まれることを知り、大学では社会や文化について考えることのできる社会学を専攻したいと考えるようになりました。社会学を学びたい、と目標を定めてからは、京都大学文学部の受験に向けて努力しました。

大学入学後は、軽音楽部での活動のほか、映画を見たり、講演会に行ったり、おもしろそうと思ったところにはどこにでも顔を出していました。夏休みなどの長期休みにはバックパックを持って放浪の旅に出ることもありました。また1回生から参加していた現代風俗研究会という集まりで、様々な個性を持つ学生や研究者たちと知り合い、研究の楽しさに触れることになりました。そうした環境のなかで、身近にいたのが社会学の大学院生や研究者だったことも、3回生で専攻を決める際に社会学を選ぶ理由となりました。何かフィールドワークをして卒業論文を書きたいと考え、テーマを「ボランティア」に決めて、自分もボランティアをしながら参与観察をしました。大阪市西成区の釜ヶ崎地域で行われていた炊き出しをフィールドにし、3回生からは毎週のように通っていました。

●自分の目と足で。フィールドワークが私の研究の原点

「調べてものを書く」仕事に就きたくて、学部生のころは新聞記者になりたいと考えていました。しかしフィールドワークや卒業論文を書く作業が楽しく、また実際にやってみると、短期間でアウトプットを求められる記者よりも、長期間調査に取り組める研究の方が自分に向いていると思ったため、学部3回生の冬に研究者を目指すことに決めました。現代風俗研究会を通して知った、社会学の大学院生や研究者が身近にいたこともあり、研究者の生活のイメージがつきやすかったこともあったと思います。卒業論文のためのフィールドワークをした釜ヶ崎は、日雇労働者やホームレスの人が集住している、男性が圧倒的に多い街です。そこでフィールドワーク中、この街で女性が生きる困難を、身をもって知ることになりました。それをきっかけに、ときどき見かけることがあったホームレスの女性が、どのようにこの困難のなかを生きているのかを知りたいと思うようになりました。院生時代は、女性のホームレスの人を対象に実態調査をしていましたが、現在は世帯内の資源配分に焦点をあてながら、ジェンダーに留意した貧困の概念や測定の方法について研究しています。

●限られた時間を工夫して子育てと研究を

私生活では子どももいるため、研究と家事・育児などの生活との両立に、日々頭を使っています。その中で心がけているのは、ひとつひとつの仕事にかかる時間や締切、優先順位を考えて、仕事のスケジュールを立てるということです。仕事を種類でわけ、午前中はずっと集中力のいる仕事、ミーティングは午後に入れるようにするなど、それぞれの仕事に適した時間に行うようにすることで、限りある時間を有効に使えるように工夫しています。自分のためだけに使える時間は多くないものの、研究に関しては簡単に理解した気持ちにならず、本当にわかったと思えるまで、時間をかけて取り組むことを大事にしています。近い将来、できればまた海外で研究もしたいし、博士論文以降の研究を本にまとめる作業もしたい。子どもの成長を楽しみながら、自分の時間も大事にし、研究を続けていきたいと思っています。